

2 課題研究のルーブリックによる評価

ア 生徒にルーブリックを事前提示する目的

本校はSGHアソシエイトの時からルーブリックを作成して活用している。本校がグローバル・リーダーの基礎と考える力の種類とそのレベルを表している。そして本校はこのルーブリックを生徒に年度当初にあらかじめ事前に提示している。SGH課題研究活動を通して生徒に「どのような力」を「どのくらい伸ばすのか」という到達度目標を定量的に明示することができるからである。生徒はルーブリックを常に参照しながら、自分たちの研究のどこが強みか、課題はどこか等を班ごとに話し合い、吟味しながら課題研究を進めた。

イ ルーブリックの活用法

<メタ認知の力を育てる>

ルーブリックは、校内で最大3回ある課題研究発表会で代表班を選出する際の審査用紙にもなるが、①高校教員が記入したもの、②大学教員が記入したもの、③生徒同士で評価し合ったもの、④自己評価したものをそれぞれ比較、吟味することで、「自分たちの研究の強みは何か」、発表会で「高得点を得るためにはどこが弱点でどのように改善すればよいのか」等の自分たちの研究の状態を振り返らせて、自分たちの研究の強みと課題を吟味して客観的、定量的に把握させ、以降の自分たちの研究改善に活かす活動に活用している。大会で入賞したいからルーブリックで高得点できるように努めることが自体、グローバル・リーダーの基礎力を伸ばすことに繋がるのである。

ウ 今年度の生徒のメタ認知の力の伸び

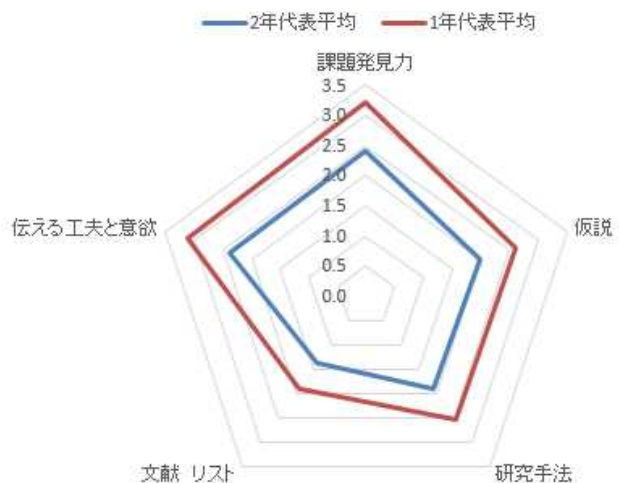
本校は中間発表会、領域別発表会とルーブリック評価を2回受けることができ、さらに代表班は12月の本発表会と計3回のルーブリック評価を受けることができる。

中間発表会から領域別発表会の間は、1年生は約1ヶ月、2年生は約2ヶ月と、超短期スパンで振り返り活動を行った。ルーブリックの結果を生徒たちにすぐにフィードバックすることで、成績をつけるための評価ではなく、生徒たち自身が、自分たちの研究の状況を自己評価する機会とすることができた。

エ (例) 12月13日の代表発表会における高1、高2の各代表3班(ずつ)のルーブリック集計結果

ルーブリックの結果を、中間発表会、領域別発表会(本発表会)の2回、各班にフィードバックした。

今年度は1年生の研究水準が充実し、2年生の平均(3つの代表班)以上に高い評価を頂いた。次年度のさらなる成果が楽しみである。



オ 各班には、大学教員などの専門家、高校教員、一般の方、また下の表では省略したが同級生からの相互評価からの記述式アドバイスも頂いた。

23班	大学教員	年齢別の宣伝法を考えたときメディアの選別はできたが、そのメディアをどう具体的に活用すればより効果的か、また、地元の名産は全国に多いため、どう競争に立ち向かうか、新商品開発の提案には、もう少し独自性を出さないことには実際は採用に至らないので注意。
	高校教員	<ul style="list-style-type: none"> ・新たな宣伝方法などを提案しており、とても意欲あふれる発表内容になっており良かった。 ・黒から揚げについて私も知らなかったので、面白いアプローチだと感じました。しかしPR方法については一般論で止まってしまっていると感じました。各年代の使用するツールのデータなどを知ることができれば、より有効な活用法を見つけられると思います。 ・年代別にPR方法を変え、個人の好みに配慮すべき等、着眼点が良いと思いました。
	一般	<ul style="list-style-type: none"> ・地元のラーメン屋さんのセットメニューで提供、学校給食、コンビニとコラボ、道の駅での販売など少し考えるだけでも沢山応用できそうで、とても楽しみです。是非、地元との協力を進めて下さい。 ・地元のソースを使ってもらいたかった。 ・地域の活性化を考えるのであれば、掘り下げ部分が大きいと思いました。 ・パパプロが何故この商品を選んだのか、佐野との歴史等から関連性があるか深堀りが必要。(パパプロにヒアリングすることも必要と思われる。) ・皆、声聞きやすくスピードも良い。質問も多く、皆が興味を持てる良い内容だった。逆に皆が突っ込みやすい内容のため質問への対応は苦労したと思います。よく応答できていました。

カ S G H事業の成果の普及・啓発と関連して

栃木県内の他校でも、地域と連携を進めて課題研究を進める活動に取り組む事例は年々増えている。しかし「連携」ありきで、必ずしも「どのような力」を「どこまで伸ばすか」、という評価規準の明確化が、まだ整理されていない印象を受けている。本来指導と評価は両輪であるはずである。そのような中で、本県唯一のS G Hとして、本校のルーブリックを十分に活用する生徒のP D C A活動は、着実に実績を挙げている。ルーブリックを活用した評価活動を、本校から発信して、少しずつ県内の諸学校に普及・啓発していきたいと希望している。